

## 第2分科会 コメント一覧

### テーマ：環境整備事業等を活用した工夫事例（魅力あるにぎわい空間の創出を含む）

No.	発表題名	コメント	コメント	コメント	総評
1	水辺環境と地域の共生に向けて～美々川・ウトナイ湖～	過去の良好な時代を目標として設定し、具体的な定量目標を設定している点が高く評価できる。	湖水位の調整の試みは珍しく、今後のモニタリング結果が注目される。一方で湖水の乾燥化の原因についての分析もあれば、より適切な対策検討の材料にもなりうると考えられる。	湖の環境変化（水位低下）に伴う生物相の変化、これらを踏まえた自然再生の目標設定と取組、取組の効果、といった一連のストーリーが分かりやすくまとめられており、参考にできる。	美々川の自然再生の目標が明瞭で、実現可能性まで視野にいった目標設定がなされている。特に、フェンが53%になるなど具体的な予測まで立てて、水位設定の根拠にしている点が高く評価できる。
2	岩木川魚のすみかの再生と保全	・対策後のモニタリングがしっかりなされ、効果の発揮状況が明確となっている点が高く評価できる。 ・一方で、将来的にどういった形で河道自体を維持していくかが大きな課題なので、具体的な対策を検討していただくのとより良いと思う。	5年以上の長期的なモニタリングに基づく、分析結果と今後の対策を総合的かつ明確にまとめており、全国的に参考となる事例と考えられる。また、UAV等の比較的新しい技術も活用されている。	過去からの河道及びアユ・ウグイの生息状況の変化を捉えた上で、その要因を推定し（仮説の設定）対策方法を検討、対策実施の後のモニタリングから仮説を検証（定性的・定量的）、さらなる課題を抽出されており、参考にできる。結果から、アユ等の産卵に必要な条件が導出されたのも評価できる。	セグメント別にその水系にとって稀有な物理環境を抽出し、そこにフォーカスを充てて、自然再生箇所を決定していったプロセス自体も高く評価できる。物理環境の経年変化と魚種の個体数の変化を丁寧に分析しており、浅場の形成と産卵の確認も丁寧に確認しておりセグメント2-1の河川再生事例として、全国に広く再生プロセスを普及する価値が高い。
3	神通川自然再生事業における環境DNA調査について	・環境DNA濃度で生息量を推定するのは先進的な取り組みで高く評価できる。 ・一方で、精度面で課題があると思うので採捕などの調査と組み合わせるその有用性を検証していただくのとより良い取り組みになると思う。	環境DNAの導入にあたり、分析対象魚種の選定、導入の目的が明示され、定量的な分析の検討、既存の調査との比較を行う等、先駆的かつ綿密な取り組みが実施されている。これらの結果を瀬と淵の再生等にどう活用するかを検討に期待したい。	第Ⅰ期事業の結果を踏まえた第Ⅱ期事業内容の設定、あわせて環境DNA調査の特質を活かした、整備箇所の効率的なモニタリング計画が策定されており、参考にできる。サクラマス類を含む魚類全体の分布の季節変化等が把握できており、多自然川づくりへの活用方針まで導出されている。	隠れ場設置当初、サクラマスの行動変容を確認するためにテレメトリー調査を行いつつ、個体数の密度把握に、環境DNAを導入し、環境変容を掴むために調査手法をそれぞれ導入し、質の高いモニタリングを実現している。実際の河川改修で河床環境をどのようにするのがよいか考える際のよい検討材料となっている。
4	淀川汽水域における干潟再生の取組について	・他事業連携による土砂投入により干潟空間が再生され、生物多様性も向上しており、とても優良な事例だと感じる。 ・一方で、干潟の維持には継続的な土砂投入が必要であるため、今後の維持について具体化されると良いと思う。	過去の変遷をもとに、干潟の減少の要因について明確に分析されており、その分析に基づく目標、計画内容が明示されている。また、UAVを用いた広範囲かつ長期的なモニタリングも実施されている。今後、生物関係の定量的な分析にも期待したい。	干潟再生試験の効果を、生息場（地形、底質）及び生物モニタリングにて継続的に把握している。次の展開検討につながる成果が得られている。	汽水域の多自然川づくり技術として、評価できる。新たに砂浜環境を創出・再生することは生物量の増加に直接的に寄与することが期待できる。河口域の背後地が工業地帯で、河川に護岸もしくは矢板などが置かれてきた環境の河川に適用できるのではないかな。
5	神代川河川再生事業について	・昔の川の姿をイメージしながら自然な川の形状を再生しており、賑わいだけでなく河川生態面での評価も行われており高く評価できる。	整備目的を明確に設定し、小規模な河川に合わせた独自の整備計画および地域と一体となった協議内容がわかりやすくまとめられている。その中で模型や護岸の試験施工等、多くの関係者と一体となった事業も実施されており、全国と同規模の環境整備事業の模範となるものといえる。	H29全国多自然川づくり会議で代表事例に選定された取組の続編である。代々の担当者が本事業の狙いを引き継ぎ、取り組んできているものと思われる。整備前後の生物調査により効果を確認している点も評価できる。	共通のイメージを模型を通じて共有し、なにが川づくりで重要かを共通認識を創り出している。0種→4種は2017年時点でも拝見した結果だったので、その後、種数に変化がないか、モニタリングも続けていただきたい。
6	藤塚地区かわまちづくりにおける新たな河川環境の創出について	・かわまちづくりにおいて利用エリアと自然再生エリアをゾーニングして取り組みを進めている点が高く評価できる。 ・今後、実際の設計・施工の際の工夫についても共有されると良いと思う。	湿地から土砂の掘削し護岸整備に活用する取り組みはコスト削減の面での参考事例となりうる。また、学識者との綿密な協議に基づく検討もされている。湿地の景観や環境教育内容について、地域住民も交えた協議が今後進むと良いと考えられる。	湿地環境創出のため、現場確認や学識者への意見聴取といったプロセスを丁寧に進めており評価できる。かわまちづくりと自然環境創出を合わせて行った好事例となることを期待。	かわまちづくりとして、都市域仙台の自然環境を享受する場として、事業を進めている点が高く評価できる。近年はじまったばかりの事業なので、今後を期待したい。
7	肱川かわまちづくりについて	・歴史文化を踏まえた水辺空間形成の取り組みが進められており、キッチンカーなどを通じて地域経済にも貢献している点が高く評価できる。	しろしたかわみなどの整備内容は、河道形状を効果的に活かしており、具体的で実現性が高いと感じた。最後の第2期のかわ、うみ、まちをつなぐ計画は、接続部であるまちの検討内容が最も重要と思われるので期待している。	豪雨災害を受けて人々と肱川との距離が離れることを危惧し、かわまちづくりがスタート。肱川の歴史的な景観や利用ニーズ等を読み解いた上で、かわとまちをつなぐ様々な工夫が水辺空間デザインに反映されており、参考にできる。第Ⅱ期以降の取組にも期待。	地域の個性（文化）を河川施設に溶け込ませている点が高く評価できる。かわまちづくりは、川の公共空間をきっかけにまちに回遊する仕組みづくりが重要であり、それを体現した事例といえる。